『広大難思の大慶喜』より抜粋

もう一歩進みなさい

一、死後の往生を楽しむのが　第二十願

二、廻向が空手形が二十願

三、慶べないのが二十願

四、真仮の水際の立たないのが二十願

五、実機の見えないのが第二十願

六、難信の法を知らないのが第二十願

一　死後の往生を楽しむのが　第二十願

自分は第十八願絶対他力に帰入していると自惚れていますが、みな他力の真似をしているだけで実機が救われていないから、みな方便化土に停っているのです。
法蔵菩薩の本願の上に方便と真実の三願があり、釈尊の説教の上に方便と真実の三部経があり、聖人の実地の求道の上に三願転入が教えてあるのに、皆これを無視して第十八願の真似をしているのですから開発した人がいないのです。

浄土真宗は往生浄土、彼土得証が据わりではありますが、この世はどうもなれないのではありません。正定と滅度は二益であります。現在の延長が未来ですから、現在開発していない者は、未来の弥陀同体の証果は得られません。それに第二十願の行人はこの世は浮世だ、この世は一生涯苦労をしても暫くの間で、後に無量寿国に生まれさして貰って、尽きせぬ楽

しみをさして頂くのだと、死んだ先の楽しみを当にさしているのです。それではこの世を逃避する敗残者で、現当二世の幸福にはなりません。

小坂の善恵房が、「尊いことだ、有難いことだ、念仏のおかげで死にさえすれば花降る浄土とは、勿体ないことだ」と言われたのに対して、善信房が「善恵房様、貴方は死んでお浄土に参るのがそんなに有難いですか、私はこの世で助かったとは猶有難いです」「何を仰る、浄土門は彼土得証ではありませんか」「それは判っていますが、今心が往生（開発）していなければ、死後の往生は当にならないではありませんか」

これが三大論争の一つで、余りにも有名であるけれども、実地に求道して開発した人がないから、皆善恵房の味方をして、聖人の真意の平生業成を体験した人がいないではありませんか、もう一歩進んだ境地に第十八願の世界があるのですよ。

往生と言えば死ぬことにしか取らないが、よい方にも取れますよ。世間でも悪い方にとってみましょうか。坊主、貴様、道楽、極道とは罵倒した言葉ですけれども、善い方にとれば、大坊の主、尊いお方、道を楽しむ人、道を極めた方としたら尊敬した言葉になるのですよ。往生の二字を往き生るると、とれば死んでから、生かされて往くと読めば平生業成、皆さんは仏智に不思議に生かされましたか、摂取されましたか、心眼を開かして頂きましたか、身体が死んでから身体が極楽に参るのですか。死骸を家族の者は泣いて見護っているではありませんか。焼けば灰になり、埋めれば土になり、白骨を残して置くだけではありませんか。魂が業だけ荷うて次の世界に飛んで行き、業の裁きを受けて、惑業苦で流転して行くのではありませんか。自分の蒔いた種は自分で刈り取るから自業自得と言っているではありませんか。それを地獄というのですよ。間なく苦しんでいるから、今が無間地獄ではありませんか。無理に死んだ先のことにせず、過去から現在に来たとみればよいでしょう、昨日が

過去、今日が現在、明日が未来なら、出た息が過去、入っている息が現在、入る息が未来、毎時、毎日、毎年に、過去現在未来があるとすれば、今の一息に心眼を開けば仏智が満入して、無上涅槃を得る原因を獲得するから死後の仏果は当然ではありませんか。それに死んだら、死んだらと、先に延ばしているのは、現在目的を達成していないから未来に希望を持たしているのですよ。

信前二十願の人は、今決定心を得ていないから、死んだらお助けと言うので、心の往生を知らないのです。信後の十八願の行人は、今自力が尽きて他力不思議に生かされているから、これを心命終、不体失往生というのです。今心が即得往生さして頂いているから現在が楽しめるのです。今三世の業障の罪が消えて、等正覚の位に住し、弥勒菩薩よりも一足先に妙覚果満の境地に至る約束が成就したのですから、再び迷わぬ身にさして頂いた大満足、人世受生の果報者、十方法界の功徳を全領して身も心も南無阿弥陀仏、ご恩返しが爪

の垢ほども出来ていないことを知らされて、身命を賭して猛進さして頂くのです。心身共に張り切っていますから、愚痴をこぼす暇もなく、病気の侵入する隙も無く、溢れる慶びに満ちて使命を果たさして頂いているのが第十八願の実行者です。

二　廻向が空手形が二十願

名号に眼をつけたのが第二十願で、第十九願の諸の功徳を修する桁から一歩前進して、善の本、徳の本たる名号には、万善万行恒沙の功徳が籠っている、諸の善法を摂し、諸の徳本を具してあるから、御文章にも「さのみ功能のあるべきともおぼえざるに、この六字の名号の中には無上甚深の功徳利益の広大なること　更に極まりなきものなり」と書いてある、広大なことだと、有難がっているのを信仰と思っているが、それは書いてあるので、自分の心に仏智が満入した慶びとは違うから、慶びは直ぐに消える、広大無辺の徳を貰いましたか。廻向すると書いてあるではないか、書いてあるのは信楽開発した人に廻向すると書いて

あるので、貴方は廻向して貰いましたか、何時貰うのですか、何を貰いましたか、無上甚深の広大な功徳を頂いたのなら、毎日が感謝の生活が出来るでしょうね。何を貰ったか、頂いたか、調べてご覧なさい。本当に廻向して貰ったのなら、精神的の大満足を得て、不平もなければ苦悩もない、大福長者の生活が出来ますか。それができなければ話だけの空手形ですよ。

南無阿弥陀仏をとなふれば　この世の利益きはもなし
五濁悪世の有情の　選択本願信ずれば
不可称不可説不可思議の　功徳は行者の身にみてり

とありますが、きわもないご利益を頂いていますか。どんなご利益を貰っていますか、不可称不可説不可思議の功徳とは、数限りもない無限の功徳と言うことですが、貴方の身に

満ちておりますか。こう問われますと何を貰っているか判らん、空手形を貰うてのぼせておいでになるから、のぼせをさげてあげると、大沼の奴は他人の信仰を崩して廻る異安心だと、自分の気に入らないことを言うから攻撃されるが、真宗の道俗は何を貰っておられるのですか。不可称不可説不可思議の苦毒は行者の身に満てりで、朝から晩まで不足や愚痴を並べ、晩から朝まで怨みや呪いで生活し、猛火に包まれ猛毒を吐きつつ日暮しをしてはいませんか。それでこの世の利益きわもなしといえるでしょうか。我々は凡夫だから、三毒の煩悩は絶えず暇なく、臨終捨命の時まで噴き出るのだと平気でおられるが、それなら三世の業障一時に罪消えてとありますが、何処で一時に罪は消えるのですか。念仏を称えながら、宗教を聞きながら、益々煩悩は猛威を振るうているではありませんか。それは言葉だけ覚えた贋物の信仰だからですよ。廻向するという空手形を眺めている二十願の方便の桁にいるのですよ、十八願の境地に達してはいないのですから、必死の求道をなさいよ、お聖教の

文句を合点しているだけですから、煩悩がご恩を喜ぶたねになっていないのです。選択本願信ずればですよ、金剛の信心を獲得すればですよ。合点したのでは駄目、机上の空論では駄目、死んで助かると思っている人は駄目、感情だけで宗教を弄んでいるので実機が照らし出されていない、実機が見えていないのに仏凡一体になる筈がない、地獄一定が極楽一定になるので、本当に堕ちた実感のない者が本当に助かった体験のある筈がない、本当に体験さされていないから大慶喜がないのです。皆素直な真似をしている贋物だから感情は助かった積りでも心の本尊が流転しているから慶ばれないのです。

唯除逆謗と捨てられた実機が、聞即信の一念で開発し、仏凡一体になった人が摂取されたので、この世の利益きわもなし、現生に必ず十種の益を得て、大満足の生活ができるのです。見る物聞く物がみな仏法となって、一切を拝みつつ感謝の生活ができるのです。煩悩があるから慶ばれないのではない、摂取されていない、首だけ十八願に入った積りでも、背中

は二十願の桁にいる贋物だから悦ばれないのです。仏智が満入していないから慶ばれないのです。廻向する廻向するの掛声ばかりで、空手形だから慶ばれないのです。親の念力が届くまで求道しなさい、晴れて大満足できるまで真剣に求道しなさい。いざ真剣に求道しようとすると知識のいないことに驚くのです。血みどろの求道を教えてくれる知識はおりませんよ。しかし阿弥陀さまにはご油断がないから、悩めば必ず開ける世界があります。聞いて知って覚えたのが第二十願の方便の桁です。この位喜ばれるから悪い処へは行かないだろうと喜ぶ心を踏台にしているのが、信前の雑修の桁ですよ。もう一歩進んだ処に難中の難の関所があるのです。実地の体験をする関所があるのです。そこを突破さされた処に、第十八願の絶対他力の大慶喜の世界があるのです。

三　慶べないのが二十願

算盤でも、一の桁と千の桁と珠を一つはじいても九百九十九の違いがありますよ。あるお

ばあさんが歎異鈔の話を聞いて「念仏は、まことに浄土に生るるたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、総じてもって存知せざるなり」と聖人が仰せられたそうなが、私も何にも知らないのだから丁度よいといったそうなが、知らないようが違うのです。信仰の入口で何も知らないのと、奥義を究めて知り尽くして、用事がなくなって知らんと言われたのと桁が違いますよ。世間で無学といえば馬鹿の替名ですけれども、仏教では何もかも勉強し尽して、もう勉強することがなくなったのを無学と言いますよ。

歎異鈔の九節目でも、真宗の信前の入口にいる人が、煩悩が出放題に出て、死にともないのが腹一杯で、感謝法悦のない人間が自分の実機を都合よく隠す隠れ蓑とは違うのですよ。信後のお二人が暗い灯火の下で、聖人さま、広大無辺のお慈悲に生かされながら、三厳二十九種の荘厳の美しさを聞かされながら、急いでお浄土に参りたい心も発らず、下々の凡夫が大般涅槃の証果を得ると安心しながらも、踊躍歓喜の心も出ないとは、何と娑婆に執着して

いるものでしょうか。唯円よ唯円よ、お前と俺は同じ心を持っている浅ましいものだなあ、麦飯を食べても娑婆におりたい、死にたいことは一寸もないが、力尽きこの命が終わるときには、安養の浄土に帰らして頂く、落ち着く先があるとは何と尊いことであろうか、いくら尊い楽しい世界でも行ったことがないのだから、娑婆の名残はつきないが、待ち続けて下さった親の里に帰らして頂くとは喜ばぬにつけても喜ばずにはいられないと、大きな喜びに変わっているのですよ。

苦抜けした二人の同行が、道で出逢うて、「どうじゃろうかのう」「さあどうじゃろうかのう」と頭をさげ合ってお念仏して別れたら、聞いていた未信の同行が、「あの人達は苦抜けをしているかと思ったら、心配そうにあんなに言ったが、後生が心配になるのだろうか」と言ったそうなが、言葉は不安、心配、疑いのように聞こえるけれども、凡夫が仏になれるとは、どうじゃろうかのう、さあこれが正定聚の仲間入りとは想像もつかない不思議の世界

じゃ、どうじゃろうかのう、とは言葉にかけられない境地を言っているのではありませんか。

真宗の道俗は喜ばれないのを手柄のように、第九節を楯に、鬼の首でも取ったように安心していますが、第九節はお二人の信後の懺悔でありますが、信前の者の気休めに使うお言葉ではありませんよ。

もう一か所、聖人が喜ばれないと言われた場所が化土巻にありますよ。「真に知んぬ、専修にして雑心なる者は大慶喜心を得ず」　真に知んぬとは、本当にそうであったなあ、信後に入って気がついたのですよ。専修にしてとは、脇目を振らず一心不乱に名号を修してはいるけれども、雑心なる者とは、心に不安があり二の足を踏んでいる者は、大慶喜心が得られない、本当に信前の桁にいる時は、名号を称えてはいるけれども、心に心配があるから手放しで喜ばれなかったが、今信後に入ってみれば、こうまで慶喜することが出来るとは

不思議であったと、信前の二十願の境地の喜ばれないのと、信後の十八願の喜べる境地とを、僅かな言葉で表現しておられるのですよ。

真宗の道俗が名号に目がついて称えてはいるけれども、皆信前の二十願の桁にいるのだから、尊い名号を眺めているので仏智が満入していない、廻向が届いていないから喜びがないのです。

聖人が喜べると仰ったお言葉を並べてみましょうか。

1 聞くところを慶び、獲るところを嘆ずるなり

2 真実の行信を獲れば、心に歓喜多きがゆえに、これを歓喜地と名づく

3 獲信見敬大慶喜

4 証歓喜地生安楽

5 慶喜一念相応後

6 ここをもって極悪深重の衆生、大慶喜心を得、もろもろの聖尊の重愛を獲るなり。

7 これ信楽開発の時剋の極促を顕し、広大難思の慶心を彰すなり

8 歓喜というは、身心悦予を形すの貌なり。

9 心多歓喜の益

10 慶ばしきかな、愚禿、仰いでおもんみれば、心を弘誓の仏地に樹て、情を難思の法海に流す。

11 常没の凡夫人、願力の廻向によりて真実の功徳を聞き、無上の信心を獲れば、すなわち大慶喜を得、不退転地を獲。

12　歓喜というは、歓は身をよろこばしむるなり、喜は心をよろこばしむるなり。

私が一寸調べただけでも、聖人のお言葉の中に喜ばれるという文字がこれだけあるのに、真宗の方々はこれが見えないのでしょうか。読んでも自分にないからピンと来ないのでしょうか。慶ばれる方が喜ばれないと懺悔されるのは、奥ゆかしいお言葉だけれども、慶ばれない者が喜ばれないと平気でいるのは横着で、乞食桃水の真似をして、桃水になりきらずに乞食になるのが関の山ですよ。

入学試験にパスしても議員に当選しても感激して晴れているのに、鬼が仏になるという一大事の解決がついても晴れたか晴れぬか水際が立たないとは、解決がついてない証拠ですよ。そう書いてある、それは体験された方が書かれたので、貴方は読んで感情が調子を合わしているだけで本性は流転しますよ。貴方は凡心で、そうかそうかと合点して理解の出来たのを他力廻向の信仰と思っていらっしゃるが、それは概念の遊戯であって、うんともすんと

も言わないあなたの実機が開発さされた時でなければ、他力不思議ではありませんよ。即ち凡心の、聞いたも知ったも覚えたも、みな学問であり智恵であり理解であり計らいであったと言葉や理屈が絶えた時、つきた時、往生の望みが絶たれた時が、仏智の不思議と一体になるのですから、凡心がつきて仏心に生き上がるのですからこれほど難しいことはありませんが、これほど明らかなこともありません。だから信前信後、二十願と十八願の水際、角目が鮮やかに諦得出来るのです。だから大慶喜があるのです。

晴れたか晴れないか凡夫に判るものかと仰る方は、話を聞いているだけで晴れていないから判らないのです。逆謗の屍が自分の実機であるとさえもわからない位の程度の低い信仰ですから、狼が羊の皮をかぶって素直な真似をしている贋物です。救われてもいない信前の者が、摂取されて懺悔しておられる信後の方のお言葉の真似をしているのでは、木に竹を接いだようで、何年経っても心の底に往生に対する不安が残るのです。それで自分の機を見るな

見るな、出来上がった法を素直に聞けと教えているのが、方便、信前、二十願の法頓根漸の他力の中の自力です。そこを突破さして頂くのが難中の難です。いかに自力の機執が浄尽されることが難しいか、そのしこりが腹にある間は顔で笑顔をしていても、出て行く後生となれば不安の黒雲が湧き出るから、喜びが出ないのです。それを二十願の桁にいると言うのです。法を見てよし機を見てよしにならねば、第十八願の行者、真の仏弟子ではありません。